



日本現代文學全集・講談社版

坪内逍遙集  
二葉亭四迷

編 集  
伊 藤 整  
龜 井 勝 一 郎  
中 村 光 夫  
平 野 謙  
山 本 健 吉

日本現代文學全集

4

坪内逍遙・二葉亭四迷集

編集  
伊藤 整  
龜井勝一郎  
中村光夫  
平野謙吉  
山本健吉



昭和37年8月10日 印刷  
昭和37年8月19日 發行

定價 500圓

© KODANSHA 1962

著者  
つげ うち しより よう  
坪内 逍遙  
ふたば 葉亭 四迷

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町3~19  
電話 大塚大代表 (941) 3111  
振替 東京 3 9 3 0

印刷 大日本印刷株式會社  
寫版 株式會社 興陽社  
製本 株式會社 大進堂  
製函 株式會社 岡山紙器所  
背革 株式會社 第一紙藝社  
表紙 日本クロス工業株式會社  
口繪 日本加工製紙株式會社  
本文 本州製紙株式會社  
用紙 安倍川工業株式會社  
兩貼 三菱製紙株式會社  
見返 神崎製紙株式會社  
用紙

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

坪内逍遙集 目次

筆蹟

細君……………五

桐一葉……………三

新曲浦島……………八

役の行者……………二

小説神髓……………一五〇

小説三派……………一〇五

『マクベス評釋』の緒言……………二〇

作品解説……………中村光夫 四一

坪内逍遙入門……………柳田 泉 四四七

年譜……………四七七

参考文献……………四七五

二葉亭四迷集 目次

筆蹟

余が翻譯の標準	四九
エスペラントの話	四三
未亡人と人道問題	四三
眼前口頭	四六
予が半生の懺悔	四六
露國文學の日本文學に 及ぼしたる影響	四三
日記抄	四三
作品解説	中村光夫 四四
二葉亭四迷入門	柳田 泉 四五
年譜	四六七
参考文献	四七七
浮雲	二七
其面影	二六
あひぶき	三〇
めぐりあひ	三六
四日間	四〇四
椋のミハイロ	四二
小説總論	四六
余が言文一致の由來	四八

坪内逍遙集

江守 敬

敬

## 細君

### 一 小間使と細君

引窓を引いて後は、昏き四方より掩ひかゝり、ランプの影は臺所の天井に月の形を寫したり。秋の日はとツぶり暮れて柱に掛かる時計の音耳につく程鳴ひやく。けふもあるじはまだ役所より歸り來まらず、離れ座敷の女隠居と縁者と聞きし十七八の娘は近い所の寄席へ行き、頬の赤い女中も買物をとゝのへに外へ出でぬ。奥も臺所も寂として、別けて新參ものゝ手持なき、お園は獨りツクネンと女中部屋に物思ひ。此時づかくと出で来るは此邸にゐる書生なるべし、長火鉢のそばへ突立ち湯呑と鐵瓶を左右にとりあげ、二三度おつけて白湯を飲み、こちらへは見向きもせず、疊を蹴立てゝ歸り行くを、お園は目を丸くして見送れり。跡は又一倍の寂しき。耳に附くは障子越しに板の間をかけたまはるいたづらもの。お園は怵へかねて立上り、障子を開けて叱々と逐へば、膳棚へにげこみてキチキチと笑ふ。膳棚を襲へば梁を走り、梁をおそへば姿をかくし、障子を閉めて座に戻れば、又いつの間にか憎い物音。逐ひくたびれては起ちもせず、しよんぼりとして吐息をつき、何を思ひだしてか、シクシクと泣居たり。

「どうかしたのかえ。」と思がけない優しい聲に、娘はハツと心づき、見上ぐる目の中に湛へし涙をまだ押ぬぐふひまもなし。知らぬ

間に奥より來りしは束髪に結びし夫人、お園の顔をつくく見えて、「誰も居ないから淋しからう。聞たい事もある奥へ。」といひさし、臺所を見廻して先にたつて戻り行く。娘は急に泣顔を直し、おそるおそる跡につき、臺所の次の間を通り、園のそばへ坐りしが、何となく改まつて、たゞ居住居が氣にかゝる。まだきのふ來たばかり、鹿相をした覚えはなければ、叱られるのではあるまいか。言葉少なくて意地わるさうな。ニツコリともなさらぬが、若し奥さまの氣に入らず、さげられたらば如何しよう。ゴクつぶしと叔母に叱られ、又つらい日を算へる事か、と小さき心おちつかず。

「園。」おそのはびつくりして、「ハイ。」「こちらへお這入り。」と言へば、「ハイ。」「宅も大勢だから、定めし骨が折れるであらう。辛抱が出来さうかえ。」と言はれる事はやさしけれど、氣味のある淋しい調子。娘は尙ほ塵をひねり、「どういたしまして。」と言ふ心を半分口の中で答ふれば、「悲しきうに見えたが、どうかおしか。氣分でもわるいのなら、何か薬でもあげようか。」と前よりも少しほやさしい問ひ、母に死別れてから、此二年、悲しさとつらさにと埋められ、毎日のやうに泣いては居たれど、まだ一たびも此様な情け深い言葉に出合はざりしお園は、總身に染む嬉しき。「有がたうござりますが、どこもわるくは有ませぬ。」と言果てゝ、心の中に此やうな情け深いお人を、意地のわるさうなと思つたは、あれはきつと見ゆる夫であらうと思ひ、見直す心にて貌を上げ、今煙草盆をひきよめる夫人の顔をじつと見る。

年は廿五六、中脊にて姿はよけれど、瘦がたと言ふよりは瘦すぎといふ爪はづれ。貌はやつれて色は青白く、頬高く見えて目は少し凹み、眉も生際もいと薄く、不人相といふではなけれど、愛嬌は微塵もない、何處かにありさうなと探しても、眼尻は少し釣上り、小さい口元は緊くしまり、額の上の青筋のみ只ありくと目について、どう見直しても、意地わるさうな、不氣味な、陰氣な、勢ひのない。あゝ、大かた御病身の奥さまであらう、お氣の毒な、とお園



は思ひぬ。

「宅もモウひとり小間使がいましたが、譯があつて下げたので、當分は忙しからう。年は十四だと言つたつけネ。それにしては體が大い。」といひかけて、お園を見つめ、「おツかさんは有るの。」「ござりません。」「おとツさんは。」

お園は少し鼻をつまらせ、「おとツさんもござりませぬ。」と言ひつゝ、怏へかねてうつむき、膝の上へ翻す涙。夫人は流し目に見やり、「それではお前はみなし子といふのだネ。誰がお前の世話をするの。」「叔母さんが。」「可愛がつて呉るのかえ。」

小間使はたゆたへり。正直な子供心に嘘はいはれず、何と言はうと考へれば、其返辭を追越してもう喉までも湧出る悲しさ。泣くまゝと思へど、怏へきれず、悲しくなつてうつむけば、夫人は長煙管をしづかにはたき、暫しの間言葉なし。二三分過ぎて煙管を置き、「外に力になる人はないの。」「何にもござりませぬ。」

お園はきたない襦袢の袖を下よりひきだし、顔をそむけて目を拭ひぬ。上に着た双子の袷の小綺麗なるも哀なり。

「今まではどういふ所にゐたの。邸へ奉公した事があるかい。」「イエ、お邸はぞんじません。たつた一度下宿屋へ」と言かけて、また曇り聲。「その下宿屋といふのは、どのやうな家。旦那とお内儀さんと、お客は大ぜいな。」「お客さまが通し十人位ゐるござりまして、間の数が七間、そして女中はわたくし一個。」と言ひ滑らして、口。夫人は別に氣もつかず、「お内儀さんはいくつ位ゐ。え、廿六。そして外には女中はなしで、お前とたつた二人きり。よくマアそれで大ぜいのお客の世話が出来たもの。氣苦勞がなければこそ。」と自身に語るやうに吐息つく。聴きひがめて、此方は眞面目。「氣樂どころではござりませぬ。それはくむづかしいお内儀さんでござりました。旦那は養子でござりますので、何事もお内儀さん任せ。それですからお内儀さんは我儘なことばかり言つて、少しでも氣に入らぬと、八釜しい口小言。殴いたり、捻つたり、朝は五時

ごろから、夜は早い時が一時ごろまで、坐つてゐる間はないくらゐ。煮たきから拭掃除、三度のお給仕、書生さんの使ひあるき、取次も洗濯も私したつたひとり。つらいこととござりました。」と包まず言ふも蔭言ならず。裏表なき子供なり。

もと此少女は、自身にも言ひし通り、頼りなき孤子なり。十二の年より叔母に養はれ、十三の年奉公に遣られ、四季折々の着物さへ人並には着せられず、給料は總て叔母の餌食。されど叔母はまだあかず、ゴクつぶしと罵りぬ。小間使としては愛くるしき貌だちも、光彩門に生ぜれば、叔母の心には不足なり。左の腕の黒痣の天然ならぬを見るものは、此二三年の艱難を思ひやり、此子の境界を不便がれど、障らぬ神に祟りなしとて、進んで引とらうといふものはなし。浮世に鬼はなければ、浮世に神もなし。下宿屋の女房ととも一通りの人間なれど、大まい五十錢の給料を役に立たずに與る法なければ、役に立たせんとて責め使ふも、つまり嫁入の下修行、當人の爲を思うての事、誰が憎まれ役を好まうぞ、と女房はいへりとぞ。されどそれにも拘はらず、叔母は下宿屋の無法を腹立ち、遂に無理やりに、お園をさげ、餘所へ奉公させようと言ひぬ。お園は思はず涙にくれ、叔母を邪見と思つたは物體なかつたと泣いて喜び、奉公といふものは此位ゐに辛いのが並の事と思つたれど、して見ればさうでもないかと「ゴクつぶし、ごくどう、いつまで叔母に苦勞させる。」と小言の雨のそぐ中で、未來を頼もしく思ひしが、「それでは爲方がない、前借を聴かぬ代り、給料を拾錢づつ殖さうから、園を元の通り戻して。」と下宿屋から仲裁の談判が來た時には、お園は又きよつとして、叔母の顔を見つめたり。斯うなつても流石は肉親、「大事の姪を十錢ばかりで牛馬にはさせられぬ。お邸へ奉公させます。お内儀さんへ宜しく。」とはねつた叔母の口上。お園はまた有がた涙にくれ、此時ばかりは叔母の笑つた口附に位みがあると思ひたり。

さて一月の給料七十錢の約束にて、此邸へ來て見れば、叔母の慈

愛をますく知りぬ。下宿屋とはちがふ大氣の邸、下宿屋にては「その」となぐるやうに呼つけられしも、「そのや」と和げて稱ばるゝさへ、小言に腫れた小耳には春風のやうに思はれぬ。隠居所の用事は、お留といふ娘が取扱かひ、臺所の水しわざもお三が大概はしてしまふ。小間使の用事は下宿屋の辛さに比ぶれば、何のマアこれが用事。極樂に行けばとて斯う安樂ではあるまい。物體ない三度のお惣菜、書生さんの喰ひあらし、それで私は澤山、と言つて悪いか好からうか、心配は只それきり。けれど、こんな不束な事で、奥さまや旦那さまのお氣に入らうか。一生こゝに勤めたいと思へど、むづかしさうな奥さま、口へ出して仰しやらぬだけ、氣心が解らない。下宿屋のお内儀さんを少し交たら勤めよいに、お邸と云ふものは顔で物をいふところか、と苦勞が教へし揣摩推察。十四にはませた娘なり。

小さき胸に斯かる浪があらうとは氣が附かねど、夫人は始終の腹壓を無言にて聴き終り、此時淋しげに、お園を見やり、「それでは十三の年からして、そんなに苦勞を爲たのかネエ。道理で體は大きいが、恐ろしく瘦て痛々しい。何處にも辛い事は絶えぬもの。併しお前はまだ子供、どんな宜い所へ縁づくかも知れない。よく辛抱をおし。世の中にはまだ／＼辛い事があります。」と獨言のやうな意見の言葉。お園は嬉しく頭をさげしが、心の中には解しかねて、之よりも辛い事とはどんな事であらうと思ひ、年上の人はどうかするとあんな事ばかり言ふけれど、子供だと思つて欺すのではあるまいか、とふら／＼と起る疑ひ、ア、誰が此やうな廻り氣を教へしぞ。

さる程に隠居も寄席がはねて、娘と共に歸り來り、夜もはや十二時と深け行きたり。今晚も旦那はお歸りではあるまい、締りをしてお寢よとの言附け。御機嫌よろしくの口儀もすみ、お園は女部屋に退り、赤ら顔の女中と枕を並べぬ。されど色々の大事が氣になつて寢附かれず。あの情け深い奥さまは御病身なのでは有るまいか。それにしてお薬をあがる様子もなし。旦那さま、存外に貧相な、と

思ひかけて自分で打消し、お丈は高し、大變な學者といふ事。月給は澤山お取りなざる。手前はいくつだ。十四か。フーム、とおつしやつた何處となく位のある偉さうなお人……お留さん……御隠居さん……お園は暫らく戸籍調べに餘念なし。「ア、みんな善いお人らしい。おさんどん迄優しきうな。どうかして永年勤めたい。ほんたうに情け深さうな奥さま、官員さまは斯うも御用が多いものか。きのおもお宿り、けふもお留守。奥さまはお淋しからう。オヤもう一時。あのボン／＼は十圓もするか。ほんとに立派なお邸。どうぞ此家へ勤めたい。」と勤めたいを思ひ寝に、其夜はあどけなき夢を結びぬ。

翌朝は日曜、殊に主人の留守なれば、人々はまだ起き出でねど、お園は獨り甲斐々々しく早く起き出でて立働らく。やさしさうなお三が内々つぶやくのは耳に入らず。湯をわかし膳ごしらへをなし、お三が起き出でしころには用事のないに困り果て、奥庭から裏庭まで隈なく掃除に驅まはる。「オ、庭掃除なれば書生がします。手水の水をとつて來て。」と隠居所の縁側から老女の聲。「お早うござります。南のお縁側にもう取つて置きました。」「さうかい。感心に氣がついた。」と褒められて、お園の嬉しさ。「ほんとに此かたも情け深い。」

段々居慣れて見れば、家中の人々一人として情け深くない人はなし。お留といふ娘は病身に口敷きかぬ代り、人も善し。「親類ぶつて高ぶらぬがあの田舎者の取得さ。」とお三は言へど、お園は決してさうとは思はず。奥さまと中をよくし、隠居さまを大切にし、又よく働らき、情けぶかいと思へり。隠居は元より善人。たゞお留ばかりを連れて、けふも物見、あすも芝居、これが少し氣に入らねど、奥さまの外出嫌ひは持前とやら、さすれば是も隠居さまのせいではあるまじ。長屋に住つてゐる車屋夫婦、これもまた善人。書生も一人あれど、これもまた善人、たゞお三のみは割合に意地わるし。されど小言に慣れし耳は此女の小言を辛いと聴かず。姉さまがあら

ば斯うも言ふであらうと思ひ、逆らはねば憎まれず。それに此おさん、人並の性分なり。なまけ根性と慾張根性とを惡魔の持前となさば知らず、さなくば決して惡魔にはならず。それゆゑ折々は手助けをされて腹を立ち、エ、小ましやくれたお節介と口へ出して獨語けど、つまりは自分の骨休めとなり、殊に蔭の事で奥へは知れず、賞められる時は自分も賞められ、さしたる損もない事ゆゑ、果は大概の「お節介」を、お園にさせて小言もいはず、只つまみ食の相伴を承知せぬを怒れども、毎日少しづつ掬めるものを、知つてゐさうなれど言ひ附けぬを「感心なあの子」の美德と思ひ、日に増し寛大に扱ひぬ。然しながら正當に評をすれば、斯う感心によく働き、見せびらかさぬお園の誠實、假令人間に惡魔ありとも、どのやうな惡魔か敢て此娘に辛く當らん。お園は品のない小さき天人にてありしものをや。

かくて二月ばかり立つうちに、家の内の事あら方は、お園の胸に入れり。お邸は斯うしたものか知らねど、奥さまと旦那さまの間、疎遠なこと仲のわるい従兄弟どしの如し。されど爭論をなさざる聲も聞えねば、仲の悪いのでは無かるべし。主人は相變らず留守勝ち。たま／＼家に在れば、來客絶ゆることなし。それゆゑ五月蠅か、けふは留守だと言ひ附けられしこと幾度もあり。ある時、ついで口が滑り、お宅でござりますと客に答へて、羽織を被流せし四十格好の男を取次ぎし時には、恐ろしく主人は立腹し、夫人まで傍杖の小言を貰ひぬ。お園は蒼くなりて慄へ上りしが、別段の咎めもなかりき。是れより、取次をするはお園の大きいなる苦勞の種となれり。又其外にも、お園の心配の元となりし事を言へば、月末の支拂ひ時なり。前の月には十七日に出入りの商人が通をめて持參せしが、今月よりは月末の拂ひに定めるから、三十日に持つて來てと夫人の言ひ附け。それゆゑ其月は三十一日に惣ての支拂ひを取次ぎしが、今月もまた暮れて、通ひ帳が臺所に堆く、商人はお拂ひを貰ひに來れども、奥よりはまだお金さがさならず。其たびに取次をすれば夫人の顔色常よりも一倍わるく、來月一緒にやる、今は少し都合があるとお

言ひ、と例時になく慳貪に言はれ、お園は何故に延引するかをまだ疑ふに暇あらず、夫人の不興を恐れ、恨めしい米屋、何の爲にお勘定を急ぐのだらう、裏長屋ならば知らぬ事、何時でも戴かれるものをと思ひたり。兎角して又一月を過すうちに、お三はどうした譯にや俄かに暇になり、退りしが、其二三日前より、散々に無法な蔭口を言ひ始め、尋ねもせぬに色々事を言へり。夫人は素と相應な官員の娘にて、師範學校をも卒業せし事、主人が書生上りなりしころ婚禮せし事、さういふ女書生だから、臺所の事は眞暗で、いやに勘定の細かい癖に人を使ふ呼吸を知らず、目端が少しもきかぬ癖に、おつに世話を焼きたがる事、夫人の母は後妻で、繼母で、氣の附かぬウツカリで、一人の敵でもなき實子のある事、今は里かたは落ちぶれて夫人からの仕送りにて、どうにか活計を立つるといふ事、一體、旦那は浮氣者で、色々シヨイコミをして困りながら、其癖きれいに手を切るといふ器用な機轉はなく、たべちらかして歩くといふ事、先達でも茶屋女をどうかして五十圓手切をとられたといふ事、今も毛色の變つた圍ひものが有との事、又昔からの借金が嵩み、内輪は立派な火の車、それに老毫の婆アさまが目も耳も利かぬ癖に外出好で、チヨビ／＼と金をつかふので、(芝居といつてもタカが鈍帳位ゐだアネ、入用は知れたものなれど) けちんぽのお心よし、お獨り御心配なさるといふ事、其外、眞と思はれぬけしからぬ事を聞きしかど、前に擧げたりし箇條をさへ、大かた嘘と思ひこみ、聞きても聞かぬお園の耳には、外の話は止らざりき。其うち圍ひ者の一條だけは幾分かさうかと思ひ當り、奥さまを氣の毒と思ひしが、借金の話は受けとらず。心はさうかと思つても、經驗がさうだとは言ひきらず。それほど困つてお出でなさらば、何であのやうな立派な服を召して、手車で毎日驅廻つたり、お客さまの有るたびに西洋料理の、仕出しのと御馳走をなさるう筈がない。旦那さまの御衣裳計りでも簞笥が幾棹、西洋簞笥が幾棹、お帽子計りでも幾つ、お靴ばかりでも幾足、馬車に乗つてお寄なされた華族さまのお客さへある

ものを、借金、人を馬鹿にした。旦那さまのお時計、あればかりでも二百圓。借金、人を。

小間使が斯う思ひ込みし信用は、たびく、拂ひを催促しながら尚ほ強がちには迫らぬ出入りの諸商人の口振を聞きて愈々堅くなりぬ。同じ催促のやうなれど、下宿屋などの場合とは大いに違へり。彼の場合にては借金取のかた手強かりしが、此邸にては反對なり。是れは借金でなき故と、お園は思へり。

一二日過ぎたれど、女中の代りまだ出來ず。おとめは此頃より或る重い病ひにかゝり、枕も上らねば手がかゝり、車屋の妻が臺所の使ひ歩きを手傳へども、お園の忙しさ限りなし。されども悪い顔もせぬ甲斐々々しさを、口では褒めねど朝も夕も、臺所を擲がけにて働く夫人の情けをば、深い内井戸の水と一緒に斟んで知るお園は、是れより又一層夫人を慕ひ敬ひぬ。

或朝やうく、慶庵より女中の代りを連れ來れり。兎も角も目見えに居よとて其女を止め置き、先づ主立し出入りの店を一々教へて置くがよいと、お園は主人に言ひ附けられ、九時過ぎに立出づる時、門外にて五十近い羽織被た見なれぬ婦人と行きちがひ、其人の邸へ入るのを見て、何者だらうと思ひながら、新參の女と共に其まゝ所を繞り歩き、出入りをも大かた教へし後、女中を慶庵に残し置き、自身は先へ歸りしが、存外ひまどりて時刻は已に十時を過ぎたり。奥には客のある體ゆゑ態と控へて水仕事、晝の用意にかゝりしが、ふと聴く事の出來しゆゑ斟酌しても子供氣に、づか／＼奥へ近づきしが、夫人の居間には老女の聲此時少し高くなり、「イ、エ、何のお前、どうもかうも思やアしません。どのやうなよい方でも、暮となれば物入りは多いならひ。一體わたしが料簡ちがひ。子に甘いから起つた事。イ、エ、腹を立つ譯はないのさ。」といふ聲を聞きかけて、様子は知らねど忍び足、今顔出しては悪からうと、お園は臺所へ戻りしが、何の話かまだ解らず。お居間へのお客といひ、奥さまへのあの口振り、さてはお里のお袋さま、と察してもまだ解か

らず。されど深くは氣に掛けず、惣菜の煮焼、膳ごしらへ、忙しきうに駆けまはる。

いつの間に老女は歸りしか、夫人は、お園の後ろに立ち、「客があつて手傳はなんだ。慶庵から來たのはまだ歸らないの。」と言ふ顔を見上ぐれば、常より悪い血色。氣は付きながら咎めもならず。新參の女は慶庵へ立寄り、何れお晝前に參るとの事、と其事譯を傳ふれば、夫人は慶庵くのみ言葉なく、隠居所へ運ぶべき中食だけは自身に料理して盛りなどせり。其中に女中も歸り來り、夫人は奥へ退きしが、心地悪しとて中食はせず。お園は深く氣に懸けて、いろいろに慰めんと思へども、取りつく島なき淋しい眼附。お園は只心配だ／＼と思へり。

午後、夫人は隠居所へ行き、暫し何事か相談してありしが、急ぎ居間へ立戻り、忙しく衣裳を着換へ、お園に言ひ附けて車屋を呼ばせ、急用が出來たれば、少しの間往つてくる。若し旦那が歸られたら、委細は隠居所へ言ひ置いたと、さうお言ひよ、と言ひ残し、浮かぬ體にて立出づる。お園は何となく氣になれど、勿論問ふべき事でなし。玄關まで送り出て、變な眼附して見送れり。長屋の車夫は主人の件をして居らねば、近邊の車夫勢ひのなき夫人を乗せ、勢ひよく駆け出だせり。お園は編みかけた毛糸物を手に持つたまゝ、うつかりと臺所の障子へ寄りかゝり、「何の用でどちらへお出でなさることか。」

## 二 親 子

夫人を乗せたる人力は、或る昔しの屋敷跡なる新開町へめぐり入れり。「ア、其處でよい」と氣のない聲に、車夫が心得て梶棒を下せし處は、一軒建ての格子造り、近頃の建て物なれば見かけだけは小綺麗なれど、壁のまだ墜ちぬに柱は歪み、建て附けには隙間が出來、長持ちのせぬ廉普請、一時の利得に忙しき是れも世情の見本

なり。夫人は車夫を歸らせて、力なげに開く格子戸。「御免なさい。」と言ひながら、其まゝ玄關の障子を開け、下駄脱ぎ捨て、奥へ通るに、我れを出迎ふ人もなし。奥行きの淺い家の中、玄關の正面は客座敷、其次ぎなるは主人の居間なり。居間には薄い坐り蒲團、削だらけの長火鉢、火壺の缺けた煙草盆、縹帯した長良字の煙管、漆の剥げし簞笥の外に、目に附くものは古机、お家流で書きかけし寫し物が二三枚、接遇顔に飛散るを拾ひ集めて押鎮め、文鎮を上へ重しにして、「オヤマア、どこへお出でなされたか。不用心な。」と獨言けば、ニヤウーといふは異様の挨拶。見返れば手飼の猫がいつの間にか後ろへ来て裾に絡むを見返つて、只其頭を撫でしのみ。尙も四邊を見廻すうち、庭の方にて咳拂ひ。「オヤお父さま、お庭ですか。」と聲をかくれど返辭はなし。「アア、お耳が遠くなつた。」とつぶやきながら障子を開け、向うの方をさし窺げば、廣くもあらぬ小庭の中に、木鉄探つて庭作り、餘念もない後ろ影。腰附きは尙ほ達者なれど、綿入れを被てさへも瘦せの見ゆる肩の尖り、缺持つ手の顫へるを、夫人はじつと見つめながら、急ぎ障子を廣く開け、縁側へ立出で、「モシ、お父さま、御無沙汰を。」と聲を掛くれば、胡亂げに、老人はゆる／＼此方を見かへり、「オ、お種か。いつ來たのだ。何かアノ何が出掛けて往つたが、行ちがつたか。」と言ひかけて、とツかは此方へ歩み寄る。「イ、エ、阿母さまに逢ひました。まだお歸りは有りませんか。」「まだ歸らぬが、そりやよかつた。マ、此方へ來るがよい。久しく會はぬが、變りはないか。定夫さんは相替らず愈々お役所は何だらうな。ヤ、どうも異つたものだ。もう不斷噂ばかり。どうも學者だけに異つたものだ。例の昇等の一件はまだ何らとも決まらないか。先達ての話では、もう直にも決まりさうで、ソ、其を敷くがよい。冷えるから／＼。おれは有る。毛布がある。」と話半分、立つたりみたり、娘にすゝむる坐り蒲團の痛い程なる屑綿も、親の誠に暖かいと思はぬか、夫人は浮かぬ顔、悄然として坐りたり。

「それはさうと、御隠居は達者かの。其方からは聴かねども、餘所から聴いて感心した。小言もいはず、世話も焼かず、たゞ道樂は外出許り。何かに附けて其方は仕合せ。それにあのお留とやら、善く出來たものだなう。おれが逢つたのは先達てが初めてだが、あれならば兎角はない。至極溫柔なしいと言ふ事だが、これも別段變りはないか。エ、血の道で……フン／＼……さうか。オ、そして忘れて居た。先達て贈つて貰つた彼の書は大したものだ。流石は定夫さんは偉いものだ。おれには十分には解らぬが、ヤ、モウ此邊で大評判。明治以來の名著だと言ふこと、五千部賣れたといふが本當か。エ、八千部。八千部とは恐ろしい。ホイ、茶をやるのをツイ忘れて、おればかり飲んでゐた。ハ、ハ、ナニサ是れがよいこれで飲みな。ソラ、此茶碗は先達て、エー、ソラどこで有つたつな。エー、ソレ、越後の何とやら言つたツけ。定夫さんの土産に貰つた、ソレ、アノ。」と頻りに眉を皺めながら、むすめが止むるを耳にも納れず、震へる手にて搔探す古簞笥の金米糖。これは貰ひ置きの古物か、持前の角もとれて甘くなりし父の氣質、一年毎に我も弱り、今を識り昔を慕ひし其口はどこへやら、滅法に若い者を褒めそやすも、娘の縁に繋がれてなり。

情が言はせる能辨に、口を入れる隙間なく、情に塞がる胸を抑へて、夫人は始終終むいて話の緒を求むるうち、急須へ二度目の湯をさし終り、「ア、ソノ、越後のどこだつて。」と氣を苛ち、教へてくれと言ひさうな顔附も、夫人は見ねば知らぬ顔。老人は漸くに眉を延ばし、「さうよ、越後の新發田だつての。」と骨折つて思出せど、答へなければ張合脱け、「どうやら貌の色が悪いやうだ。風でもひきはせぬか。どうも俄に寒いから。エ、どうもせぬ、それならば好いが。お組はどうしたか、大變に遅い。晝前から出掛けてまだ歸らん。馬鹿な。何をして居やがる……何か馳走がして遣りたいが。」「おとつさま、飛んだ事。他人がましい。そんな御心配なさいますな。お土産を買つて來る筈が、つい急いだので忘れて仕舞つ

て。「それこそ本當に餘計なこつた。たび／＼同じ事を言ふやうだが、毎月定夫さんの厄介になり」と言ひかけて咳拂ひ、二つ三つづく際に、「他人がましい、改たまつて。」と喉まで出たる言葉をば、言ふに言はれぬ夫人の胸、どういふ事を思つてか、淋しげに横を向き、そつと溜息を吐き居たり。老人は氣が附かず、「それさへ有るに今日は又、とんだ事を言つて遣つて。」「サア、其事に就きまして。」「イヤ、どうも無心千萬。決して其方へ聞かせんで、どうにかしたいものと氣を採んだれど、去年も既に世話を掛け、又疊みかけて今年まで」「ナニ、私の身の土さへ昔の通りでありますれば、少しも何でも有りませんけれど。」「其方はさう言つてくれるけれど、いくら自分の女だからとて、縁附けば他家の人間、さう／＼は無心も言はれない。又言はれても言ふのが道でない。言ふまいとは思つたなれど、大方お組から話したであらう、與四めが相替らずソノ何での。大概は聞いてくれたであらうが。」「ハイ、詳しく承はつて是れが去年の事であれば」「ヤツぱり其去年の一件で、あの折五十丈入れたので、残りの分は毎月々々月賦で返す筈になつたなれど、實は面目ない事であれど、ツイ其何での。」「イ、エ、其事ではござりませぬ。去年のやうでござりますれば」と又言ひかくるを早呑込み、老人は獨り點頭き、「成程、さう言つてくれるのは、どのくらゐ嬉しいか解らぬが、洋行の留守中にも無心を言ひ、今年も亦た無心を言ひ、イヤ實に氣の毒な。留守中よりは定めし物入りも多からうに。」「其物入は兎も角も、實は私はお父さまに折入つてお願ひがござりまして。」「エ、お願ひ。何だかおれで役に立つ事ならばだが、ア、どうしやがつた。もう歸つて來さうなものだに。マア煎茶でもやるがいゝ。其うちに何か何する。しかし實に有難いことだ。お叱りで大きに安心した。お組は例の通り八釜しくての。ヤレ、あなたは氣樂だの、平氣だのと、ヤ、どうも五月蠅く言ふが、どうして、斯う見えても、中々何で。」と言ひつゝ、又も急須に湯をさし、「これもみんな定夫さんのお叱だ。此間も學校での、オ、あの事を

まだ言はなんだ。月給も今月から二圓だけ殖やしてくれて、マア喜んでくれるがよい。ふと定夫さんの噂が出て、己の婿だとは知らぬと見えて、世辭氣なしで大變に賞めた。實は私の婿だと言つたが、其時はおれも鼻が高くなつての、歸つてからお組にも其事を話して「イヤ、格子戸が開いたやうだ。お袋が歸つたか。」と言ふせぬのに空耳の忙しき。女の願は忘れてしまひ、獨り頻りに喋り口りる。言ひそゝくれて尙更に、いふ潮時を失ひつゝ、夫人はじつと流し目に、父の面を眺め詰め、胸にこだはる四苦八苦を吐き出すまいか、どうしたらよからうと、心配を貌に見せても、悟つてくれぬもどかしき。

や、有つて又出直し、「只今申しましたお願ひは外の事でもござんせぬが」と言はうとしたる折も折、がらく／＼と聞く格子戸は繼母の足音。又も話を見合せぬ。それと知つてゴロつく猫を手持ちなさに掻き寄せ、すり抜けて駆け行けば、「エイ、うるさい。」と例になく手荒く前へはね飛ばし、ツ、と入る母のお組。父は初めて氣が附いて、「オ、遅かつた。どうしたのだ。今ソノ何が」と急ぎ込んで不足を言へば、不足な顔。「如何した處か」と言ひかけて、母も初めて心付き、「先刻は」と小聲にて挨拶をする女へ會釋。目ばかり光らせて座に着くを、老人は氣短かに、「先刻から待つて居た。何かお種に何したいが、何か有るまいか。」と何盡し。母親は氣の無さうに、「さやう。何にしませうか。お種さん何に爲ようネエ。」「どうぞモウお構ひなさらず、おつかさま、先刻は寔に失禮を致しました、實は」「どうぞ致しまして、お物入りの多い所へ、とんだ事を言つて、嘸アノ何でありましたらう。」「今もそれを言つた事さ。外の時と違つてなう、年の暮と言ふものは」と口を挿む老人を尻目に見遣つて、「さやうですとも。あなたは其通り御承知だけれども、わたくしは誠に愚昧ですから、少しも先さまの事をお察し申さず、づう／＼しく推しかけて往つて、寔に無理な事ばかり言つて」と言ひさして、口先ばかりでホ、と笑ひ、「どうも濟みませ

ん。」といひ足して、何やら言ひ忘れたやうな顔附。老人は頓着なく、「おれも其事を言つたのさ。去年と云ひ、今年といひ、與四の事で世話をかけて。」さうです。與四があゝの通りの大馬鹿ですから、與四の事計りで御厄介になつて、誠に本當に濟まないこつて。眞に向うさまは御尤で。」と頓へ聲にて言ふ母の貌を見上ぐる勇氣も無し。斯う言ひたいと思つても、胸に何やら大きなものが支へたやうな心持、夫人は覺えず涙ぐむ。斯くと父はまだ氣附かず、又思ひ出す馳走の相談、敵手が乗らねば氣を急燥ち、女が止むるも聞かばこそ、「おれが一寸往つて来る。」と立たんとする時格子戸口に、「先生はお宅ですか。とうに時間になりました。」と若い男の武骨な聲。老人はギツクリし、「ヤ、これは何であつた。ススグに參る。只今參ると言つて下さい。ツイ丸で忘れて居た。」

當時此老人漢學の教授に雇はれ、近所の私學校へ通ひ居りしが、全く時間を忘れしなり。催促をされて、はじめて氣が付き、氣がついて大きに狼狽へ、萎れし女、膨れし妻女、二人を躡がして袴を穿くやら、羽織やら。「見ツともないからチャン／＼は脱でお出でなされませ。」と世話を焼かれる其下から、そでなき書物を取上げて是れではないと又取替へ、懐膨らし草履をまさぐり、貌は後ろを振り返り、「二時間過れば歸つて来る。緩悠居ても今日はよからう。歸途に何か言ひ附ける。マアよいわ。久し振りだ。歸るまで待つて居るがよい。」と言ひ／＼表へ出行きぬ。

曇りかゝりし冬の空、まだ二時なれど、短き日暮、片影は既に昏くなり、沈んで聞えるは上野の鐘。氣は尙更に重くなり、母が小用に立ちし間は只猫の脊をまさぐり、夫人は思ひに暮れ居たり。

「おつかさま、先刻は定めしお腹が立ちましたらう、御免遊ばして下さいまし。實は其事に付きまして、もうお歸りになつたであらうと、お尋ね申しました處、まだお歸りがなとの事で、お父さまへ其事をお話し申さうと思ひましたなれど」と言ひ懸くれば母親は怪訝な顔。「オヤ、何かと思つたら先刻の事。とんだ事。何の私が腹

を立つ譯はない。どうしまして、私の方にこそ無理は有る、お前さんの言ふ事を悪く取る譯は有りません。」さう被仰れては、誠に何でござります……おとつさまへは申しにくいこと、どうぞおつかさま、あなたからよいやうにおつしやつて。「何の事か知りませんが、お父さんへお前から言ひにくいやうな事、私から言はれやう筈がない。すぐにお言ひなさるがいゝやネ。」夫人は少し顔を赤くし、二三分躊躇ひぬ。

母親は煙草を摘み、長煙草を取上げつゝ、吸はうとして貌を皺め、舌打をして一つはたき、急に立つて押入れを手荒く引きあげ、反故を荒々しく引摺りだして、馳て元の座に立戻り、手荒く紙を引裂いて、裂き損なつて舌打ちし、頻りに小燃りを燃り始めぬ。夫人は漸く思ひ返し、又母の方に打向ひ、「お腹の立つは御尤でござりますが」と言ひかくるを、口早に打消して、「馬鹿らしい。おこつちや居ませんよ。をかしい人だ。」と笑ひ聲で口では言へども、笑はぬ目元氣味悪し。夫人は尙も押返し、「それなれば誠に嬉しうござります。お話を申しますは、外の事でも御座りません。今迄はこんな事を、お耳に入たくはない事ゆゑ苟にもお話し申さず、それゆゑ今不意に申しましては、定めしお父さまは吃驚なされ、色々に考へて御心配もなされようし、行末はどうならうと御苦勞なされようかと、口までは出ても言ひにくゝ、今も今とて言ひそゝくれ、それゆゑおつかさまに此事をお留守のうちに詳しく申し、おつかさまからよいやうに、私の覺悟も申しますから、御心配なさらぬやう、お話をなされて戴きたく」と決心しては淀みなく言ひ出づる夫人の言葉。母親は煙管の掃除を爲ながら、流石に餘所には聞き流さず、「何だか私には解らないが、聞いて置いて好い事なら、遠慮なくお言ひなさい。」と言ひつゝ、煙管を吹いて見て、又も小燃りを捻り居る。「おとつさまは私しを良い所へ縁附いた、仕合せ者だと被仰て、よく氣を付けて大事にせよ、と度々の御異見なれど、それは内輪の入組みを少しも御存知がないからの事。私しの身の上は、斯う言つては唐突でござ

りますが、寔に辛うござります。」と言ひさして言ひ淀む。母親はキツと見返り、何か言ひさうに口を動かし、鼻で息して何にも言はず、綺麗になりし煙管をば尙丁寧に拭きみたり。

夫人は又言葉を續き、「外邊ばかりを御存知ゆゑ、お父さまは私しどもを安樂に暮してゐて仲もよく、苦情もなく、苦勞も無からうと思し召してござりますれど、そんな風で有つたのはホンの當座一年だけ。洋行を。」と言ひかくるを、母親は急に打消し、「それは十分に解つてゐます。大家は大家だけに色々心配も辛い事も五月蠅い事もありませうとも。お父さまは察しが無くとも、私が察しなけりやならない譯。イ、エ、さうさ。イ、エ、さうしなけりや濟まないのだけれど、御存知の通り空惚だからネエ、好い年でも、ツイ何して、イ、エ、お前さんはさう思ふまい。さう思ふだらうとも思ふアしません。だが、イ、エ、私が濟みません。自分の氣が濟まないのさ。エ、此猫は五月蠅いと言ふに。」と寒さに膝を求めてくる猫を後ろへ投り出し、又氣が附いて柔和な顔。「チヨイと往つてもよく解るよ。今は女中も一人のやうだし、姑は有るし、お留さんは居るし、色々氣兼ね多からう。」夫人は少し目を濕ませ、俯向きしが、思ひ返し、「イ、エ、そんな氣苦勞なら、假令どのやうに辛からうと、お耳に入れば致しませぬ。それよりは幾倍のつらさ。妻と言ふは名ばかりで。」と言ひさして思はずハラ／＼、落つる涙を恥かしと横向いて暫らく無言。「私は離縁したうござります。」と包括めたる大とゞめ。流石に母親も目を見張り、暫らくは顔を打守りぬ。雙方共に默然たり。

嗚呼、世の中に邪推といふ悪者なくば、人の心に波風は無からうものが、さうはならぬ浮世。母親は驚きながら不審、不審から邪推と廻り轉つて、ヤツぱり繼子根性、わたしへの面當半分、離縁がしたいと拗振のかと、氣をまはしたが絡で、黒雲のかゝりし心、イツかな、女の言葉もきかず、聴いても外の意味に聴いてしまへば、此相談は横へ外れ、夫人の言葉にもソツが出れば、母親は尙更のこと。

「よしんばさうで無いにせよ、二十六といふ年になつて出戻りをし、女教師になつて、それで暮さうといふ氣が知れない。成程、お前は學者だから、外聞がどうだ斯うだとお言ひだが、妾の二三人は當然の事さ。言はゞ男の働らき。よしお妾が出来ようとも、本妻は本妻の心掛け次第で、どうともなりません。お前の利巧にも似合ない。そんな事をおとつさまに言へば、どんなに力を落して、どんなに取越苦勞をして……困るものは私ばかり。一體こんな事は直接におとつさまに言つたはうがよいのさ、どうせ出来ない相談なら、私へ態ツと話すには及ばない。」

此やうな行違ひの最中へ、歸つて来る父親は、日がやうやくに春きかけて、空はいよく曇りし昏きに、涙ぐみし夫人の様子も見えねば、格子戸を潜りし時、一調子高くなりし母親の聲を聞きながら、耳遠ければ並の聲に聞き、一向に頓着なく、「今井を持ってくる、お組、一銚子つけてくれ。きのふの残りがあるだらう。」と言ふうちに井も來り、澁々ながら膳ごしらへに母親は立働く。やがて膳も罫も出來たれど、喜んで喋口るは父親ばかり。母は膨れ、猫も膨れたり。かゝる時は猫が馳走にありつくなり。

### 三 とつおいつ

紫の雲霞と棚びき、有難き妙音ひゞき、窈窕たる天人の舞ふところをのみ極樂の店がかりと思ふべからず。淺ましき田舎家の夕顔棚の下蔭にも、安樂の光明はきらめくなり。三階造りの高殿に銀燭の光り星を欺き、管絃の聲沸くが如く、男女のさゞめき樂しむけはひ、手に取るやうに聞ゆるとも、人間の春を此處に買占められしと氣を揉む勿れ。麗しき花壇にも醜き蛇の蟻れば、煌々と耀くもの悉くは金にあらず、綺麗びやかに見ゆる袂にも、包むに餘る憂事あるべし。先祖の經驗に偽りなくば、幸福の神の定宿は無事平穩の境にて、別けて長閑なる胸の上は彼神得意のお旅所なり。鳳凰の炙りぎ



かな、籠籠の囊、人間は名を聞いても肉動けど、神さまは元より胃袋なく、誂へ織の純子の蒲團も、吾々は見て羨めど、手足を持たぬ幸福は撫牛と同じかられば、かしてへ御輿を移せよと神託ありし例もなし。されば心の長閑ならぬところ、昔より幸ひを居らしめず。引合にするも古事なれど、驕る平家の奥殿にも蕭條たる秋風に枯るるを恨みし艸はありき。又唐土の昔を思へば、絹張の扇の力も浮いたる君王の心招かず、歸らぬ夏を歎きしとか。人間の不仕合せは、無論其時の運不運、理窟を言へば、鬚の有無にて差等のあらう筈はなけれど、さうばかりにも言へぬが浮世。格別氣の毒なるは鬚なき人の身の上なり。誰か束髪と共に女の身方殖えしといふや。同權論を書く主人も原稿料を得し後までも竟に持論を行はねば、細君はいつまでも頭の上る時はなし。誠に唐人のいひし通り、つまらぬ者は女言ひ附け通り、右へ向け、左へ向け、束髪がよい、丸髻に限る、洋服を着な、紋附にせよ、斯うせい、あゝせいと無理難題。それをイヤといへば、曲事也、と大筆特書した七去の定め、三従の掟は廢れたれど、樂屋を窺へば扱もくゝなり。足を知らぬ女郎と當人は言ふべきが、シラ、マリヤスの跡繼ぎにシーザーを下されても悦ばぬが眞の自主。伊右衛門の家を出戻つて鈴木木水に嫁ぎし女を仕合せと言はれる事か、言はれぬ事か、モシ考へても御覽じると理窟を言つても追附かず、昔し希臘の碩學が我を折しも茲にあり。今も昔も依として、他人によるの弄びと、身を下さす人の哀さよ、と獨り女の肩を持たば色氣狂とや嘲けられん。嗚呼、女は朝顔の花の如し、恨みは長く夢に似たれど、盛りは恵みの露に濡れ、朝日待つ間の只一時、短く脆き命なり。見る目を奪ふ黒塗馬車、舞踏會の花帽子、ダイヤモンドの指環、おかひこぐるみの不斷着、左右に侍る腰元の頭數、新聞紙の雜報へ何爵夫人と書かれし事、きのふは花見、けふは芝居……ア、こんな事幾百ありとも、只うはべのみを垣のぞきして努々それを羨む勿れ。正眞正銘の幸は、却つて餘所に彷徨なり。

經濟雜誌の大爺は言はれたり、西洋風の文明は九尺二間の周圍にありと。ア、旨い事を言つたものかな。男女同等の影法師も、げに裏屋には立惑へど、破風作り以上には氣も内證の昔風、襟善好みの半襟に躡ぐ身を知る雨垂れは、木綿布子に迸る眩笠雨よりも辛しと知れ。探ればつらく浮世。嗚呼、これが本調子か、又は我流の浮世節か。

前回の話を續く前に、夫人の内實を語るべし。夫人の夫某と言ふは、當時才子、學者、洋行濟、日の出の官吏、評判よき著述家などいふ資格にて、世間に名の聞えし紳士なり。年齢はまだ三十一二、其容貌を言へば中の下なれど、十六七の小女にあらぬ者は、さる事を苦勞にすべくもあらず。さりながら羽織袴一組にて社會に出でし若武者の習ひとて、今尙種々の負債多く、其催促絶間無ければ、夫に代る細君の身は問のわるき事も多かるべし。されど當世の紳士に連添ふものは、誰れかさる筋を細君の義務と觀じ、浮世の習ひと諦めざらんや。且つ又、夫は外出好きにて、前回にも見えし通り、大抵は家に留まらず、それこれつらき事多かるべけれど、昏き方計りを穿鑿せば、極樂にも日あたりの厚薄はあるべき道理なり。試に明るき方を見れば、姑はあれども、老い朽ちて物の用に立たぬ替り、五月蠅き口小言は殆ど言はず、小姑に似たる血族の少女も、意氣地なく、加ふるに病身なれば、少し使ひにくき小間使も同じ事、主人が鼻屑せねば、ひがむにも及ばず。摺れる採めるなどといふ種もなし。夫人の境遇は異口同音に幸福と評し合へり。

里方はといふに、父の免職後段々に零落れ、邸も賣拂ひ、山の手に移りしが、女よりの仕送り私塾より得る報酬とは、尙ほ借家の體裁に嗜好をなし、此上に寫し物は大儀なれば止たしと贅澤を云ひ、末子を學校に入塾させ、且つ晚餐の膳の邊に一壺を添ふるに足るといへば、相應に立昇る煙の太さを思ふべし。其中に只一つの苦勞を言はぶ、件の末子與四といふ向う見ず、今年廿の大人となり、肉を食飽きて茶屋をそり、會席を暴す口を持ちながら、今尙ほ父